北海道新聞

発信 地域から

弟子屈

自立を目指して

不登校、ひきこもりの若者支援

幅広い世代の移住進む

（下）

釧路管内弟子屈町の市街地に9月、カフェ「BBシープ　コーヒー」が開店した。店で主に働くのは不登校やひきこもりの子供を育ててきた母親たち。この春、埼玉県や兵庫県の4人が弟子屈町に移住してきた。

4人のうちの1人、宇高加代子さん(58)は「弟子屈の塾の活動に少しでも役に立ちたいと思って来た」と、神戸市から移住した理由を話す。

母親も勉強会

同町に開設された不登校生やひきこもりの若者を支援する塾は、自立に向けた授業の一環でカフェや農園で就労体験を行う。NPO法人の大越俊夫塾長(81)を中心に運営する塾は神戸に次いで2カ所目で、宇高さんら4人の子供も不登校やひきこもりを経験し、神戸の塾に通っていた。

大越塾長は、保護者も対象に親子の関わり方などを学ぶ勉強会を開き、母親らが悩みを打ち明ける場にもなっている。宇高さんは「親子でも過度に依存せず、それぞれが自分の人生を歩く大切さを学んだ」と振り返る。

不登校だった娘は今、神戸で社会人として働く。宇高さんは弟子屈のアパートに暮らし、カフェに通い、調理や接客を通して就労体験に来る塾生をサポートする。新天地で迎える初めての冬。「戸惑うことも多いが、これからも弟子屈で暮らしたい」

カフェ「BBシープ　コーヒー」で働く宇高加代子さん（右から2人目）と母親たち

客の声が励み

カフェは、塾生らが農作業を行う農園を整備した「ビービーシープ」（神戸）が経営する。摩周湖の伏流水を使ったコーヒーや、発酵学の専門家の指導を受けて作った弁当が人気を集める。

中学時に不登校になり、弟子屈の塾で過ごす藤岡丈さん(25)は、カフェで就労体験する傍ら、専用車の「コーヒートラック」を走らせ、いれたてのコーヒーを販売する。常連客もでき「頑張っているね。おいしいよ」と言われることが励みになる。「弟子屈の人は温かい。いつかはカフェの従業員として働きたい」と目を輝かせる。

町も塾生を温かく見守る。塾生の教室や居室を貸す屈斜路湖荘の管理人伊藤幸彦さん(69)は、住民と草野球をする塾生たちの姿に目を細め「とても素直で、息子のように感じる」と語る。徳永哲雄町長は「弟子屈の自然と人との交流を通じ、大越塾長の理念が育ってきた」と話す。

大越塾長は、若者の自立を支えることは地域おこしにつながると強調する。「不登校もひきこもりも、はじかれる子供や若者に問題があるのではなく、はじく社会に問題があるのではないか」。幅広い世代の人がありのままに生きられる地域づくりを実現しようと、新たな構想を描いている。

（弟子屈支局　高橋力）